

● テーマ ●

# 小田実の思想と文学

—全体小説を短編で書くこと—

The Thought and Literature of Oda Makoto:  
Writing Short-Stories as Holistic Novels



2010年12月14日（火）

● 発表者 ●

ローマン ローゼンバウム

Roman ROSENBAUM

シドニー大学名誉アソシエイト

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Honorary Associates, University of Sydney

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 発表者紹介

---

ローマン ローゼンバウム

Roman ROSENBAUM

シドニー大学名誉アソシエイト

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Honorary Associates, University of Sydney

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

### 略 歴

平成 16 年 12 月 Ph.D. (シドニー大学)

平成 20 年 1 月 シドニー大学 名誉アソシエイト

平成 22 年 4 月 国際日本文化研究センター外国人研究員就任 (平成 23 年 3 月)

### 著書・論文等

#### Articles (論文)

- ‘From the traditions of J-horror to the representation of “kakusa shakai” in Kurosawa’s film *Tokyo Sonata*,’ (黒沢 清『トウキョウソナタ』の中における
- J ホラーの伝統から格差社会への描写), *Contemporary Japan*, 22(1/2), 2010, pp. 115-136.
- Tezuka Osamu: Adolf - towards a historio-graphic novel (手塚治虫 : アドルフ・史料編集の劇画に向かって), *International Journal of Comic Art*, 12(1), 2010, pp. 415-434.
- ‘The Graves of “Three Thousand Soldiers”’: A Study and Translation of Oda Makoto’s “Sanzen gunpei” no haka’ (小田実『『三千軍兵』の墓』の翻訳と研究), *Journal of the Oriental Society of Australia* (JOSA), Vol.41, 2010, 27-56.

#### Chapters (章)

- 「石川淳の『焼け跡のイエス』を巡って」ウィリアム・タイラー・鈴木貞美編著『日文研叢書 45 石川淳と戦後日本』ミネルヴァ書房, 2010, 97-114 頁
- Edited Book* (共編)
- Rosenbaum Roman and Claremont Yasuko (共編) *Legacies of the Asia-Pacific War: The Yakeato Generation* (大東亜戦争の遺産: 焼け跡世代) London: Routledge, 2011.

# 小田実の思想と文学

——全体小説を短編で書くこと——

ローマン・ローゼンバウム Roman Rosenbaum

国際日本文化研究センター [University of Sydney]

小田実の書いたものに解説はいらぬ。小田実が小田実を語り解説する。

武藤一羊 むとういちやう

## ご挨拶

ただいまご紹介に預かりましたローマン・ローゼンバウムでございます。本日は、フォーラムの主催者を始め、国際交流基金京都支部の皆様、そしてここへお集まりいただきました皆様にご挨拶申し上げます。誠にありがとうございます。まず始めに簡単な自己紹介をいたします。

私は一九六六年（昭和四一年）オーストリアの首都ウィーンで生まれました。十八歳の時に初めて来日。そこで暮らしていたオーストリア人女性と一緒に小学生に英語を教えたり旅行したりするうちに、その国と、彼女に思いがけなく惚れてしまいました。一緒にオーストリアへ行ってみないかと誘われ、日本から出発してアジアの各国を経て、南方の国に向かいました。長い旅の果てにシドニーに到着。しばらくしてから大学で本格的に日本語を勉強し始め、結婚し、男の一卵性双生児が生まれました。下手の横好きで頑張って、大学二年生の時に交換留学生として法政大学で二年間。その時、勉強より部活に頑張りました。おかげで日本の文化に親しみました。帰国後、大学院入学のために再び来日して、早稲田大学院で博士論文を執筆。二〇〇四年、大江健三郎論で博士号を取得。二〇〇五年、『玉砕』を読んでから小田実の研究に励むようになりました。二〇一〇年度、国際日本文化研究センタ

ーの外国人研究員として日本の戦後文化——戦争の傷跡と焼け跡、闇市世代——についての研究活動をしています。何が私の関心か、何に惹かれるかと聞かれれば、戦後日本文学とそれにちなんだ大衆文化が大好きです。将来の目標は、小田実の研究を進めて、彼の全体小説の文学的鑑賞の一翼を担うことです。

### 前置き・小田実の国際文学 (International Literature)

日本近現代社会では、作家が皇室(Chrysanthemum Throne)のことを書くのは暗黙のタブーとなっています。それは大江健三郎「政治少年死す」と深沢七郎「風流夢譚」ふうりゅうむたんを読めば分かるように、右翼テロ事件を触発する恐れがあるのです。それでは、なぜ小田実は検閲されずにテンノウヘイカのことを書くことができたのでしょうか。後で分かるように、小田はエッセイ、評論ではざつくばらんに率直な書き方をするのに対して、小説などの虚構では比喩または寓意でものを言う、たぐいまれな作家です。

彼は眼を閉じ、ジープの走り去る姿を思い描き、ジープよ、走れ、と言った。ジープは彼の閉じた眼のなかで懸命に彼から走り去って行こうとしていたが、彼はしきりに先祖から言い伝えられた呪文のようくり返した。ジープよ、走れ。彼をのせて、走れ。

テンノウヘイカよ、走れ。走り去れ。二

この奇妙な文章を吟味しながら、私は本講演で、小田実の日本文学がいわゆる世界文学 (International Literature) であること、そしてそれが、どのように世界の懸け橋として機能しているか、小田実の短編小説の中に現れる本質を、ときほぐしたいと思います。さて、先の文章で小田実が取り上げている、二人の「彼」とはいったい誰なのでしょう。また、この短編小説の繰り広げられている世界とはどこなのでしょう。

その前に、私がなぜ小田実の文学を研究しているかについて、一言申し上げたいと思います。平成二二年五月二〇日、国際日本文化研究センターで行われた「報道関係者との懇談会」で多くの記者たちから、研究テーマは何でしょうかと、熱心に質問されました。ほとんどが新聞社の文化部や生活文化グループ、学芸部などで日本文化について記事を書く人々でした。つまり、私のような新任外国人研究員が日文研、あるいは日本に何をしにやって来たかについて好奇心を持たざるを得ない方々です。私は大抵の場合、「日本の戦後文化を研究しに来ました。特に、戦争の傷痕が、焼け跡世代と闇市世代の手によってどのように伝えられてきたか、ということに関して興味を持っています。焼け跡というと、ご存知のように、野坂昭如、大江健三郎、東京都知事を務めている石原慎太郎など代表的な人物がおられますが、中

でも特に小田実には関心をもっていきます」と、答えます。それで、だいたいの記者たちは感動してくれて、「大分古い話を研究なさって、大変ですね」とか、「大変古めかしい難しい話じゃないですか」と共感をこめて、気の毒に思われるようです。

そんな時私はいつも、焼け跡世代と小田実は、誰もやっていない、かなり変わった研究テーマなのだろうな、と思うのです。そして次に、記者たちから、「その難しいテーマを勉強する原点は何でしょうか」という興味深い質問を投げかけられて思うのは、「もっとみんなのように切磋琢磨し合うことのできるテーマを選べば良かったのに、いったいなぜこんなに難しいテーマを選んだのだろうか」ということです。

気がついたら、自分でも良く分からない。なぜ、自分のような六〇年代生まれの人間が戦争の傷痕を示す文学に惹かれるのでしょうか。自分自身は銃後の苦難や戦争の体験をまったく持たないのに、それに対して関心や好奇心がどうして生じてきたのでしょうか。記者会見ではうまく答えられなかったため、今回はきちんと小田実の話をしながらその答えにたどり着きたいと思っています。

たとえば、もっと普遍的に、今の戦争を知らない日本の世代、特に現代格差社会に苦労する「失われた世代」などに過去の歴史の重さをうまく伝える方法は何かと言いますと、やはり読者をうつつりと虜にするような小説を通してということになるでしょう。

つまり、なぜ私が小田実の文学に関心を持つようになったか、結論から言えば、次のとおりです。小田実が自分の文学の中に、日本あるいは日本人のことだけではなく、世界各国の問題点を取り上げて、複合的な全体小説として様々に普遍的なものをうまく表現しているからです。

複合的な全体小説とはどういうことかと言いますと、本日のフォーラムにも「小田実と市民運動を語り考える会」の方がたが見えています。その会の名にふさわしく、小田は世界と語り合いながら、自分の小説を通して、たとえばドイツの西ベルリン、アメリカ、ベトナム、在日韓国人など、一見異質に見える世界の様相を包括的に伝えようとしたのです。

ここでもまずは、小田自身が発言した次の言葉から出発してみます。

廃墟は、それを見た人に、何か、宿命的な力をおよぼした<sup>三</sup>

小田は、日本の現代社会の中に現れる比喻としての廃墟の上に立ち続け、「赤茶けた面積」の遺産を探り出そうとしたのでした。小田の思想のまなざしこそが、「戦後思想」を貫く精神であったといえるでしょう。小田は、そこから歩み始め、常にそこへと立ち返ったのです。小田の精神的、思想的な故郷となった場所——まっぼのおびし 廃墟。同世代の作家、真継伸彦は、廃墟の経



験が小田にもたらした変化を次のように説明しています。

一言でいえば敗戦が、彼をきわめて早熟な作家に育てあげたのである。大阪に育った彼は、自身がくりかえし語っているように、戦争の惨禍をつぶさに体験した。私たち同世代の者にとって戦争がもたらした廃墟はしかし現実のそれだけではなく、同時に思想の廃墟でもあった。私たちは無数の生命の難死をみた直後に、それまで私たちを絶対的に束縛していた天皇主義という価値体系の崩壊をもみた。それは直接には教師たちの変節という姿であらわれ、思想を娼婦の衣装のように容易にとりかえる人間への不信が私たちの原体験となったのである。これはすでに言い古されていることであって、ここで詳述する必要もないだろう。しかしたとえば、戦後に精神的な恐慌におちいった教師が、戦争犯罪人に指名されて、逮捕されたり職をうばわれることをおそれて、「ね、先生はみなさんにこんなことを教えませんでしたね」などと卑屈な口調で戦争中の発言をとりけそうとし、生徒に共犯を哀願する、そのような姿が小学生の眼にどう映ったかはぜひ想像してほしい。私たちはすべてそのように痛ましい変節をみたのだが、そこに強烈な印象を受けた者は、すでに人間存在に投げかけられている根本的な問いかけを知ったのである。四

しかし、このような戦争体験によってつくられた思想の原点が、どうして、戦争世代から懸け離れた位置に置かれている現代社会の人々と関係を持つことになるのでしょうか。まして、私のような外国研究員が、一体どのようにその研究の一翼を担えるというのでしょうか。先に取り上げた「テンノウヘイカよ、走れ」についても少し考えてみると、このような疑問に対する小田自身の返答が分かるのではないのでしょうか。この短編小説の主人公「土人」は若い時に、彼らの島にやって来た日本軍の守備隊の様子を好奇心から見守っているうちに、その指揮官である自称「ニッポンブラザ」と親しくなり、片言の日本語や、童謡、軍歌などを教えてもらって、次第に深い信頼関係を持つようになります。しかし、時が経つに連れて、徐々に戦争の風向きが悪化していくと、小隊長の「ニッポンブラザ」は部落の住民を搾取し、その果てには、日本軍隊の秘密保持と敵軍がその部落の資源を利用できなくするために、本部の命令どおりに原住民の村落を焼き払う決心をします。指揮官は原住民の犠牲を少なくしようとして移転を求めますが、主人公の叔父にあたる村長は先祖の土地を離れることを拒み、抵抗します。窮境に追い込まれた指揮官は、主人公の叔父を自分で射殺した後に部落に火をつけて焼き払ったのです。主人公を刀で抑えながら、一通の証文を書き与えた場面です。「もしオレが死んで帰れなかったら——。ニッポンブラザは血走った眼で彼をにらみつけながら言った。オレの魂はテンノウヘイカを連れてここに帰って来る。テンノウヘイカが必ずつく

ないをしてくださるのだ」と約束するのです<sup>五</sup>。このように、原住民の主人公の眼から、東南アジアに取り残された日本帝国の残酷な遺産を描き出した短編小説ですが、それは全体小説でもあります。文字通り、「意識」と「肉体」と「社会」<sup>六</sup>の二つの観点から創り上げられており、しかも、物語の主人公は未開の異者でありながら、舞台の環境は、植民地の外地であり、小田は、短編小説の中に表現されている未開人の位置を土人から、「ニツパ小室のフンドシ兵士」と置き換えて、日本帝国の植民地主義を皮肉と風刺によって示すのです。さらに、彼は歴史を遡って物語を進行していきます。

やがて年月が流れ、敗戦後、様々な目的で日本人の団体が現地のジャングルを再び訪れるようになります。この短編小説の中では、原住民を研究する学者、資源開発を目的にした調査隊、日本人ヒッピーの少年が滑稽に描かれます。段々年をとってしまった土人の主人公は、かつての指揮官「ニツポンプラザ」の約束が実現することを期待し、習い覚えた片言の日本語や知っている限りの軍歌、童謡などを通じて、訪れる日本人と交流しながら、「彼」が来るのを待ち、証文を隠し続けるのです。

そして、もはや待ちきれなくなつた頃に、原住民が証文を披露して語り始めようとしています。しかし、日本人はいずれもそうした原住民を物珍しそうに眺めるだけで、過去の惨劇に対する「デンノウヘイカ」の謝罪の言葉どころか、慰めの一言すらかけることはありませんでし

た。最後に訪れた団体がジープで村を離れてゆく様相を眺めながら、主人公は、奇妙な表現で呪文をかけて、「テンノウヘイカよ、走れ、走れ」と心の中で繰り返し続けるのでした。

小田実がこの「単作全体短編小説」を通して訴えているのは、過去の戦争において犯した日本の罪の事実を決して忘れ去ることは出来ないということ、また、戦後の時代を生きる我々も、その罪を他人事で済ますことが出来ないということだと思えます。先祖または先人の犯した罪を我々自身の罪として認めることは、我々の先人に対する義務でもあり、それが出来ない限り、我々もまた、同じ罪を犯し得る恐ろしい可能性を持った存在に他ならないという極めて複雑な気持ちがあります。

さらに言えば、小田の作品が間接的に表現している、このような戦争に対する反省は、けっして日本だけの問題ではありません。戦争から長い年月を経た多くの国々が、ずっと以前に植民地主義という大義名分で起こした罪に対する謝罪をようやく表明するようになったのです。たとえば、私の国オーストラリアの「白濠主義」、アボリジニにとっては「盗まれた世代」、また南アフリカの「アパルトヘイト」などです。つまり、小田のこの小さな短編小説を通して示された、日本の太平洋戦争に対する責任感情は、世界の植民地主義の遺産ともつながっており、国際社会における文学のひとつの傾向を示すものでもあるのです。

全体（短編）小説に向かって…野間宏と小田実

小さな集まりからの帰り道、電車の中で小田さんが突然、何か思いついてうれしそうな顔をしたのです。「大江くん、君は全体小説家だ。そしておれは全体小説家だ。そこが違うんだ。」

何が違うか、おわりにならないでしょう。私もわかりませんでした。

そこで小田さんは説明しはじめました。自分はあらゆる問題を小説に書き込むという点において「全体小説」を書く人間だから「全体小説」家なのだ、と。一方、君は、全体「小説家」だと。

「君は小説のことしか考えないのだから、全体が小説家だ。そこが違う」（笑）。<sup>七</sup>

小田実は、国内では、まず第一に『何でも見てやろう』を書いた作家として——少なくとも、いまだに若いつもりでいる団塊世代の読者層にとっては——有名です。第二には、言うまでもなく、ベ平連の運動家として名声を得ました。この二つがだいたい一般常識となつていますが、では三つ目の特徴は何か。小田の小説をよく読んだ人々に聞くと、やはり長編小説家として有名ではないかという答えがわりと多く返ってきます。例はもちろんたくさんあ

りますが、二つ代表的な作品を挙げるなら、「ベトナムから遠く離れて」（七千五百枚余）と、『すばる』の一九九九年三月号から二〇〇七年五月号まで、およそ八年間にわたって連載され、最近完成に至った「河」となるでしょう。「河」は全九十章、四百字詰め原稿用紙にして総計六千枚に及ぶ、文字通り最期の大作です<sup>八</sup>。実は、この三つ目の要素が、日本国内において小田実の文学的、社会的な遺産を成しているのではないかと私は勝手に思っています。それでは、海外ではどうか。残念ながら、一般的には小田実の文学はほとんど鑑賞されていないという事実を認めざるを得ません。私のように若いつもりでいる日本の文学研究者がようやく彼の小説を知るようになったのは、ドナルド・キーン<sup>九</sup>による『玉砕』の翻訳が二〇〇三年に出たからです<sup>一〇</sup>。

さて、ここでは、小田実の文学とそれに基づく思想に関するもう一つ重要な要素について話したいと思います。あまり良く知られていないと思いますが、小田の作品には、長編小説の影に潜んで数多くの短編小説が存在しているということです。少なくとも、私の知っている限り次の六冊の短編小説集があります。

一九六五（昭和四〇）『泥の世界』（World of mud）河出書房新社<sup>一一</sup>（単作）

一九七七（昭和五二）『列人列景』（A series of people, a series of scenes）講談社（連作）

一九八一（昭和五六）『晦冥——太平洋戦争にかかわる十六の短編』（Kaimei: Sixteen short stories involving the Pacific War）講談社（連作）

一九九八（平成一〇）『アボジ』を踏む——小田実短篇集』(Stomping on 'Aboji': Oda Makoto short story collection) 講談社（単作）

一九九九（平成一一）『さかさ吊りの穴——「世界」十二篇』(The upside-down painted hole: twelve short-stories from the world) 講談社

二〇〇三（平成一五）『子供たちの戦争』(The children's war) 講談社

これら短編小説の集大成には、雑誌に連載した連作集と単作が様々な形態で収録されています<sup>二〇</sup>。さらに、たとえば『新潮』二〇〇〇年六月号の川端賞作家短編特集に掲載された「終る」のように、上記の短編集に収まっていない作品が他にどれほどあるでしょうか。

それほどたくさん短編——中には『アボジ』を踏む<sup>二一</sup>と題した、第二四回川端康成賞（一九九七年）を受賞した作品もありますが——を書きながら、意外にも小田は短編小説家としてはあまり知られていません。小田文学の唯一のモノグラフを書いた黒古一夫が指摘するように、≪「珠玉のような小作品というのが肌に合わない」と小田実自身が若いときに書いていた≫<sup>二四</sup>。それでも、やはり、年をとるに連れてだんだん短編小説も書けるようになって

ったのではないでしょうか。短編小説に関して、初期の「やりきれなさ」という感覚がなぜ変わってきたかという点、小田が野間宏の作品と出会ったからに違いありません。具体的に言えば、小田は『評論撰4』の自伝的な「あとがきとしての年譜」の中で、一九七三年九月にカザフスタンの一番大きな町アルマター(Almaty)で行われた「アジア・アフリカ作家会議」<sup>一五</sup>で、野間宏と堀田善衛に親しく対面したと書いています<sup>一六</sup>。その後、小田は野間宏の批評を数多く書き、作品を熟読した結果として、次のようなことを言うようになります。

私は長編小説と短編小説のちがいはたんに小説の長い短いの問題ではないという考えをもつ。おそらく、ちがいは、根本的には、骨格の問題なのだろう。そこへいくと、野間宏は、日本文学には珍しい長編小説家であると思う。すくなくとも、長い短編小説の作家ではない。私は長編小説が好きなので、書くこととともに読むことが好きなので、野間宏が好きなのだろう。そんなふうと考えてみると、野間宏の短編は、どうやら、純粹の短編小説ではないような気がしてならない。人生の一断面をサツと鮮やかに切つて、よつてすべてをホーフツとさせる、というような名人芸には野間宏は熟達していないらしくて、というよりはおよそ才能がないらしくて、彼の短編小説は、すべて、きわめて長編小説的であると私は思う。彼は人生の一断面をサツと鮮やかに切る代りに、短編小



説の領域においても鈍重に一つの世界をつくり上げようとする。『暗い絵』にしても『顔の中の赤い月』にしても読後感は決して短編小説的ではない。(傍点原文「野間宏のもどかしさについて」『小田実全仕事10』所収) 一七

これは、武藤一羊が「小田実が小田実を語り解説する」と指摘したとおり、野間宏の短編小説の特徴というより、むしろ小田実自身の短編小説について述べたことに他なりません。言い換えれば、小田は野間の全体性を借りて、短編小説に関する概念にさらにもう一つの側面を添えて、自分の小説を進行させていったのです。小田は一九九二年、『異者としての文学』に収録されているエッセイの中で自分の文学概念について、次のように言っています。「私にとって文学、ことに小説とはいったいなんだろうか？と考えると、できあがった価値観、できあがった世界、——世界といっても、世界情勢の『世界』という意味ではありません。私たちが持っている世界です。自分の内部を含めて、生きている空間の『世界』です。その世界に対して、異質なものを、異なったものをぶちこむことである——そういうふうに私は考えています」<sup>一八</sup>。小田はいろいろな工夫を凝らして、その抽象的な「異質なものを」を小説の中に具体的に表現しています。一方、野間宏の全体小説は、もともとその概念を提唱したサルトルが、『自由への道』でその実践を提示したとおり、人間の生きている現実の総

体を一つの文学作品として表出しようとする試みであり、一九世紀の小説でいえばトルストイの『戦争と平和』やスタンダールの『赤と黒』、二〇世紀前期の小説でいえばブルーストの『失われた時を求めて』やジョイスの『ユリシーズ』がこれに該当します。

### 小田実の全体小説の特徴

さまざまな創作方法をもったオムニバス小説集というよりも、巻頭の『アボジ』を踏む」を中心の核として集められた七篇の短篇小説による、「全体小説」のこころみともいふべき小説集のようである。一九

小田の『アボジ』を踏む」が単作として「川端賞」を受けたことをきっかけに、短編小説集『アボジ』を踏む」が編まれ、一九九八（平成一〇）年三月に講談社から出版されました。それは、『列人列景』（一九七七年・講談社）や『晦冥』（一九八一年・講談社）のように「連作」の形で雑誌に連載した作品をまとめた、いわゆる「連作短編集」とは異なり、もつと時代を遡る一九五七年から一九九六年の間に書かれた、独立した七つの短編を収録したものです。

先の引用は、探偵小説家、なかぞのえいすけ中蘭英助氏が同年六月、『群像』に書いた評論ですが、『「アボジ」を踏む』は、共通点を持つ独立した数編の短編小説を一つにまとめた、いわゆるオムニバスですが、ふつうのオムニバスとは少し違ってきます。収録作品に共通するのは、「全体小説」の試みであると言えるでしょう。そこで、小田の全体小説にはどんな特徴があるのかという疑問が自然にわいてくるわけです。

まず、日本文学の全体小説における代表的な作家の一人、野間宏の全体小説像と見比べる必要があります。小田実自身は、野間の全体小説について次のように述べています。

野間氏はおそらく自分の内部に無数の異者を見出していたのだと思う。共生し、ぶつかりあう異者だ。その共生し、ぶつかりあう異者 A、B、C を土台にして、彼は自分の『小説世界』をかたちづくった。異者 A、B、C はそれぞれに体内実者 D、E、F … をもち、D、E、F … を土台にすることで彼の『小説世界』はさらに大きくひろがる。これが彼の『全体小説』だった。そして、彼の濃密な一分の隙もないような文  
体も、こうした異者の無限の連続の必然の結果だったにちがいない。<sup>二〇</sup>

つまり、自分の物語にいくつかの異者を取り入れれば、より簡単にポリフォニー的、かつ

全体的小説世界を作り上げることができるとです。この異者を挿入する方法が二人の作家に共通しているのですが、野間にとつては、たとえば、『真空地帯』(Shinku chitai Zone of Emptiness、一九五二年)の主人公である二人の軍人木谷と曾田は、世界観、地位、階級などが違つても、あくまでも日本人です。また、自伝的小説『わが塔はそこに立つ』<sup>二二</sup>では、一九三〇年代の京都帝国大学生である主人公海塚草一を通し、知的日本人の内面の葛藤を私小説風に描き出しています。

それに比べ、小田自身の小説世界とその文体はかなり異なっていると云えるでしょう。野間のようにただ数多くの様々な日本人の異質性を横並びに置くだけでは、小田らしい「小説世界」は立ち上つてきません。小田の世界は、もつと立体的でトランスナショナルなものです。野間の全体小説を支える隠れたイデオロギーは、まず野間の戦争体験とそれに対する反感としてのマルクス主義であり、また、文学の側面からいえばフランス文学と象徴主義の詩の影響が見られます。小田の場合も、似通つた戦争体験<sup>二三</sup>が文学と思想の土台を成してはいますが、野間文学のように国内事情と日本人にこだわる主人公は、小田文学にふさわしくないのです。それより小田の描く異者はまず、異なつた文化圏、社会、民族、国などの様相から成り立っています。早い時期から小田の立脚点としては、国内異邦人としての韓国人を視野に入れていません。続いて、本人が「私の自伝的小説論」の中で告白したように、すべて

の正義の中心、開放、自由の中心が、「ベトナム」へと転回して行くのです<sup>二三〇</sup>。

繰り返しになりますが、小田実は日本人の位置だけではなく、人間が多義的な存在であること、その人間が構成する社会が単色でないことを前面に打ち出すことで、小説世界に全体性を持たせようとした、と言えるでしょう。小田は早い時期に、その最初の未熟な例を、『わが人生の時に』（一九五六年）で表現しようとしています。そして、最初は脇役だった在日朝鮮人は徐々に、たとえば、『阪シンフォニー』には二世のMP（憲兵）や朝鮮人のおっさん、無国籍の少年という登場人物を配し、また、『玉砕』の中心人物として中村軍曹と金伍長<sup>こんごうちょう</sup>という、日本人と韓国人を一对として登場させるなど、異者の韓国人を主役の位置に押し出していくことになります。

三十六年間の植民地時代という〈負の歴史〉を背負った在日朝鮮人は、日本人にとって単なる〈他者〉というより、存在の根源に問を發する、最も近くにいる〈異者〉に他なりません<sup>二四〇</sup>。小田は〈異者〉としての在日朝鮮人を、自らの小説世界に取り込んでいたことになります。「朴圭植」(Bak kjae shik)は『わが人生の時に』の第一章で、語り手の「由利」や友人の「永沼」に、自分が在日朝鮮人であると告白させることによって、物語に「マレビト」<sup>二五〇</sup>のような来訪者を導入するのです。

しかし、小田はこのような風来坊的な道化像（トリックスター）を、バルザック流に、神

の座において世界をぐるっと見まわす、といったタイプの「全体小説」として描いているわけではありません。小田の「全体小説」はあくまでも、戦後日本国家のヘゲモニー（影響）を超越するために、多くの異者たちの蠢く世界を形作るものであると言つてよいでしょう。  
二六。

### 小田実の全体短編小説に向かつて…一つの見本

小田は、野間宏、また中村真一郎などとは違つて<sup>二七</sup>、異質性の豊富な全体小説を書きました。第一次戦後派文学者のように戦争へ駆り出されず、銃後で戦争を経験した小田は、急激な思想の転向に伴い、権力に対して何らかの違和感を感じました。国内ではなく、まず海外で、自国の社会や文化の事情を「よそ」の場所から描き出すというやり方を見つけたのです。彼の思想上の救いは、海外（特に西洋文化の起源をなす古代ギリシャ哲学）にあります。国外を旅することによって、小田は、国内のイデオロギーを征服する方法を生み出していきます。そして、国内にいる時も想像力を働かせて、日本をよその目で観察しようとした。彼は次のように説明しています。

私は散歩が好きです。そのさい、自分の住む西宮という都会を、きょうはどここの田舎か

ら来た人の視点で見てやろうかと考えたり、朝鮮人の視点で考えてみよう、アメリカ人の視点で考えてみよう、というふうにして散歩することがあります。そうすると、いろいろものが別の形で見えてきます。なかなかおもしろいものです。ぜひおやりになってください。また、ほかの都会へ行つたとき、どこか適当な所で適当な家——空想の話だからなんでもいいんです。適当な家を見つけて、そこに住んでいると仮定するのです。そう仮定して、どういう人生がここで出現するだろうかと空想するのはなかなかおもしろいものです。私がここに住んでいるとすると、あそこのマーケットで必ず買い物をする。そこの飲み屋で飲むだろう——というようなことを考えながら、実際にスーパーマーケットに入ってみたりするのは、ついでに飲み屋にも入ってみよう。そこに住んでいるような感じで、単に行きずりの人ではなくて……。そうすると、いろいろものがあるかなかおもしろく見えてきます。そのところ異質なものであればあるほど、自分が異者であればあるほど、その見えてくる度合が激しく大きいような気がします。二八

小田はこのように、いろいろなものがおもしろく見えてくる仕組みを見つけ出すのです。小田文学の重要な仕組こそが異質の描写であればあるほど、自分が異者であればあるほど、日本国家を超越できる度合が激しく大きいような気がします。小田の全体小説では、自国の

思想影響圏を乗り越えるために、物語に異者・異質・他者などといった、「日本的ならざるもの（非日本的なるもの）」、すなわち異国情緒を取り込んでいます。中でも、最も早く現れたのが、一九五八年に初めて外国に行く前の作品「わが人生の時に」（一九五六年）における在日韓国人の存在意識でした。そこに描かれた在日朝鮮人の「朴圭植」は、第一章で語り手の「由利」や友人の「永沼」に自分が在日朝鮮人であると告げることで、自分が〈他者〉でしかないことを明らかにし、その言動によって彼は作者から「トリックスター」の役割を与えられることとなります<sup>二九</sup>。

自分が実は朴圭植（これは [Bak k'ai shik] と読む、と注釈があつた）という朝鮮人であることを述べた後に、「君もこれから日本人田中俊治の友人ではなく朝鮮人朴圭植の友人となつてほしい」と結んであつたのである。三〇

日本国家主義による朝鮮半島における三十六年間の植民地政策が生み出した〈負の遺産〉とも言うべき在日朝鮮人・韓国人は、日本人にとっては単なる〈他者〉というより、この国の近現代史を問う最も近い存在であり、重要な鏡の役割を果たす〈異者〉なのです。その意味で小田実は、第二作目で早くも、後の「冷え物」（六九年）や、七千五百枚の大長編『べ



トナムから遠く離れて』(九〇年)あるいは『民岩太閤記』(九二年)で重要な役割を果たすことになる(異者)としての在日朝鮮人・韓国人を、自らの小説世界に取り込んでいたということになりました。

異質性をこしらえることによって小田が何を成し遂げたかったかという点、単一民族、日本人論、被害者意識などで夢中になった国内の戦後社会の言論を異化させることでした。つまり、小田は戦後派文学の全体小説の心(心理)、生理、そして社会の三つの根本的な要素に、「異」性を付け加えたのです。

## 結び

没後に出版された未完成の代表作『河』を始め、小田の文学的評価は少しずつ高まってきています。その言論がたとえば、北村毅きたむらつよしの『死者たちの戦後誌』(お茶の水書房、二〇〇九年)や、小熊英志の『〈民主〉と〈愛国〉』(新曜社、二〇〇八年)など様々な分野で引用されることによって、次第に小田文学のルネサンスが起こっているのではないのでしょうか。二〇一〇年から一四年にかけて、講談社では、彼の文学・思想・評論を収録した『小田実全集』全八二巻を電子書籍(ebookjapan)として販売します。私の知る限り初めての電子版個人全集になると思います。

小田実の文学世界の真髄は、鳥瞰図的な全体小説の試みにあると言えます。大長編小説の多面的な天地万物は言うまでもありませんが、こじんまりした短編小説にも、ある場面の全体（いわゆる、閉ざされた単一民族国家の日本としてではなく、多民族的視点―国家境域、文化、歴史を超える要素）を描き出そうとする主題／中心思想（*leitmotif*）が確かに見られます。つまり、日本の社会・文化を評論するために、小田は「よそ」の場所や他者、異文化などの相容れない話を書き続けてきたのです。でっかいアメリカ合衆国であれ、小さいジャングルの部落であれ、彼の文学は、世界各国と自国をつないで普遍的な異者を描き出す「世界文学」です。小田実と直接話すことができなくても、彼の遺した作品を通して、小田実と一心同体はこの世を見ることはできると思います。そこに彼の文学の魅力があるのです。

さて、最後に、偶然の出会いからなぜ小田実を研究するようになったかと言いますと、先にも少し申しましたように、彼の作品の土台を成す古代ギリシャの民主的な考え方によって、そしてあくまでも「人間のチョコチョコ」を通して、日本の文化・社会、最終的には自分の国のそうしたものがより明らかに見えてきたからです。

京都には、そろそろ歳末大売り出しのシーズンが迫って参りました。そんな時に小田実の文学を一種の福袋と思えば、すぐに中身が分からなくても、読者にとっては必ずや喜びを与えられる、有用で豪華な内容であるに違いありません。私が本日ここに来た最も大きな理由

は、皆さんと一緒に小田実さんを偲びながら、彼の文学を楽しむことでした。お話しする機会を与えてくださったことに感謝いたします。

### 参考文献

*Ampo: a report from the Japanese new left*, No. 1 (1969)-no. 18 (1973); V. 6, no. 1 (1974). Tokyo: Pacific-Asia Resource Center.

玄順恵「インタビュー：『途中』にある、ということ」『青春と読書』二〇〇八年六月号。

井上ひさし（他）『憲法九条、あしたを変える——小田実の志を受けついで』、岩波書店、二〇〇八年。

小田実、ティナ・ペプラー、ドナルド・キーン『玉碎(Gyokusai)』、岩波書店、二〇〇六年。

小田実『小田実評論撰4』（90年代—これは「人間の国」かなど）、筑摩書房、二〇〇二年。

小田実『「アボジ」を踏む』、講談社、一九九八年。

小田実『異者としての文学』、河合出版、一九九二年。

小田実『小田実全仕事』一〜一一巻、河出書房新社、一九七〇〜七八年。

黒古一夫『小田実「タダの人」の思想と文学』、勉誠出版、二〇〇二年。

鈴木貞美「野間宏の位置」、「文藝」編集部編『追悼 野間宏』、河出書房新社、一九九一年、

一三二～一六一頁。

### 日文研フォーラム質疑応答

当日、コメンテーターの鈴木貞美先生を始め、フロアの皆さんから次のような忌憚のないご意見、ご質問をいただきました。

質問1…「戦争のキズ跡と焼け跡、闇市世代の…」とありますが、この闇市は世代的に分けられるのではなく、ここは「闇市」時代と言うべきだと思いが如何でしょうか？

回答…大変興味深い質問だと思います。日本の闇市世代というより、まさしく「闇市時代」の方が時代の流れを懸命に表している。ついでに、「闇市時代」は、日本国内はもとより、当時の全世界的なツアイトガイスト（時代精神）をよりよく示しているとも言えるでしょう。

質問2 (玄順恵ヒョン・スンヒェ…小田実未亡人)…日本の作家としては大変、異質な作家だと思われるふしを、今日の講演を聞きながらよく判りました。しかし、このような異質性は、やはり、世界の文学史的概念からいうと異端、あるいは少し違ったものなのではないでしょうか？それとも、文学の概念からいうと普遍的なものなのでしょうか？(世界文学史の視点から)

回答：日本の純文学の作家たちは(大衆文学作家に関しても同じことが言えると思いますが)、ネーティブの土着性、宗教、風習というごく当たり前のように身の回りにあるものによって物語を繰り広げていくのです。言わば、こういった言論空間が、やや狭い日本的な思想の流れを生み出しています。しかし、おっしゃる通り、小田はまず古代ギリシャ思想を日本的なるものと重ね合わせて、新たな混合思想に基づいた文学を生み出しました。「旅の子」としての小田はさらに、世界のありとあらゆる場所の土着性、宗教、風習をも取り入れて、世界の普遍的な小説を書いたと言わざるを得ません。こういった面で、小田実の文学は世界的であるということに私も全く同感です。

質問3 …野間宏『青年の環』と対比させた論があったことから、小田実の小説をあくまで全体小説として規定していたと思います。もちろん、この大きな見取図があればこそ、

サルトル『自由への道』などの全体小説群における小田文学の特異性を論じる意義と土壌が確保され、ローマン先生の研究が着実なものとなるのでしよう。しかしながら、小田文学の特質をその「異質さ」の歓迎あるいは他なるものの曳き入れと見るならば、小田文学をビルドゥングスロマン（教養小説）と見なす別の道が開けてくるのではないのでしょうか？たとえば、ドイツ文学のお家芸である教養小説と比較した上で小田文学の教養小説としての特異性について、論じることができるのではないのでしょうか？

回答…全くおっしゃる通り、小田実と野間 宏の対比は、見逃してはならない小田文学に関わる重要なテーマです。特に、長編小説を多く書き、社会全体の構造をとらえる全体小説を志向した野間氏と小田の文学的な意思は、等しい性格を示しています。小田は、一九七三年九月にアルマータで行われた「アジア・アフリカ作家会議」の総会で、日本の代表者として中心的存在だった堀田や野間との新しいつきあい、つながりを形づくることによつて、日本とアフリカの国際関係に積極的に関わっていくことになりました。さらに言えば、小田と野間の文学的なつながりは次第に強くなり、たとえば、一九七九年から一九八二年にわたって刊行された同人誌『使者』の中で行われた共同研究が、二人の関係の一つの頂点を示しています。今回取り扱うことが出来なかった両者の間に生まれた、原稿用紙八千枚を超える恐ろしく長い超大作——たとえば野間の『青年の環』（一九七

一年)にせよ、小田の『ベトナムから遠く離れて』(一九九一年)にせよ——は、典型的な全体小説として日本文学の主流を成していると思えざるを得ません。しかし、これらの作品をサルトルの『自由への道』(一九四五〜一九四九年)と対比すれば、全体小説の概念は少しまとまりにくくなると思います。そもそもサルトルは、一つの超大作というより、三つの作品を成す実存主義的なオムニバスを書こうとしていたのです。最後に、ビルドゥングスroman (Bildungsroman) について一言述べますと、全く小田の小説モチーフに相応しい概念だと思えます。ただ、今回議論した前衛的な短編小説というより、小田の中編ないしは長編小説において議論すべき話題だと思います。

質問4…ベ平連と言えば鶴見教授を思い出します。彼に直接教えてもらったのですが、小田さんとの考え方やその後の進み方には違いがあったのでしょうか。

そして、彼らの残した考え方や、またその意味づけは、この現在にどう生きているのでしょうか。過去の大戦も経済戦争であり、現在もまた、過去より民主的に考えようとする世界と、相変わらず社会の仕組みが異質な世界との間で経済戦争が続いています。これもまた今後、世界戦争の火種となって行くのではないのでしょうか。

回答…小田実と鶴見俊輔は、親しかったというより、深い友情関係を抱いた同僚だったとい

つても過言ではないように思われます。二人は多くの思想的な共通点を基盤にして、戦後社会の思想史に重要な役割を果たしました。だが、二人はやはり少し世代が違って、鶴見氏のアメリカでの捕虜收容所というような経験などに対して、小田は幼い時の無差別的な焼夷弾投下の経験によって「致命的傷を負った」。さらに、少し単純化して言えば、鶴見の哲学的な行動の枠組みに対して、小田は文学的に政治運動家の活動を送りました。現代社会に残した彼らの思想的な遺産とその意味づけは、たとえば「九条の会」による反戦運動、すなわち日本国憲法第九条を守ることを通して生きていくように思います。世界の天然資源がだんだん減って行くにつれて、経済的または資本主義的な理由により再び経済大戦が勃発しうる可能性が非常に現実的にあると思います。残念ながら、我々が小田、鶴見氏の思想・文学的な遺言を理解できない限り、おっしゃるとおり、世界紛争の火種となりかねない。そこから生じる閉塞感を乗り越えるために、私自身も皆様と一緒に、お二人の残されたりテラチュアを勉強させていただきたいと心より願っております。





ローマン・ローゼンバウム、鈴木貞美



ローマン・ローゼンバウム、玄順恵

- 一 「解説…革命的不機嫌」『小田実全仕事 10 評論4』、四一九頁。武藤一羊はいいだもや吉川勇一と一緒(よしかわゆういち)にベ平連と共労党(きょうらうとう)を兼ねたメンバーだった。また、一九六九年に英文雑誌『AMP O』を創刊し、一九七三年にはアジア太平洋資料センター(PARC)設立にも関わっている。
- 二 小田実『「アボジ」を踏む』一三六〜七頁。初出は、「テンノウヘイカよ、走れ」『群像』一九七四年二月号)。
- 三 小田実「廃墟のなかの虚構——戦争体験の意味」『小田実全仕事 8 評論2』、六五頁。
- 四 黒古一夫『小田実「タダの人」の思想と文学』、四七頁。
- 五 小田実「テンノウヘイカよ、走れ」『「アボジ」を踏む』、一三三頁。
- 六 鈴木貞美「野間宏の位置」、「文藝」編集部編『追悼 野間宏』、一五五頁。さらに、「野間宏が早くから、『全体小説』の理念をもっていたことの証左ともなろう。『意識』と『肉体』の結合、そしてそこに外から働く社会的な規定性をも把握し、それらを総合的に結んで『人間の全体』を描き出すという企図」と明確に説明している(同書)。参照…野間宏『全体小説への志向』、田畑書店、一九六九年二〇三頁。
- 七 井上ひさし(他)『憲法九条、あしたを変える』、四頁。
- 八 玄順恵「インタビュー…『途中』にある、ということ」、六頁。
- 九 Donald Lawrence Keene はコロンビア大学名誉教授として日本文化を欧米へ紹介して数多くの業績を残したアメリカの日本文学研究者、文芸評論家である。
- 一〇 太宰治、三島由紀夫、安部公房の作品などで有名な翻訳者 Donald Keene が、なぜ小田の小説を訳したかについて、「崇高にしておぞましき戦争」(『玉碎/Gyokusai』、二〇〇六年)という対談の中でキ

ーンは、小田の洞察力に感動し、玉碎の事情を世界に知らしめると決めて、その仕事を引き受けたと説明している。

一〇 『泥の世界』に収録された「ある登攀」と「折れた剣」は、『アボジ』を踏む』に再出している。

一一 小田『アボジ』を踏む』、二八四〜五頁。

一二 『群像』一九九六年一〇月号

一三 黒古一夫『小田実「タダの人」の思想と文学』、一二五頁。

一四 アジア・アフリカ作家会議は一九五〇年代に成立した植民地支配から脱却しつつあったアジア・アフリカ諸国の連帯である。さらに、一九七四年三月、日本アジア・アフリカ作家会議の準備会が結成され、

参加の呼びかけがおこなわれた(『新日本文学』一九七四年五月号掲載)。呼びかけ人には、大江健三郎・

小田実・中野重治・野間宏・堀田善衛らが名を連ねた。同年五月二五日、東京で結成総会が開かれ、野

間宏議長、堀田善衛事務局長が決まった。

一五 小田実『小田実評論撰4』、五八二頁。

一六 黒古一夫『小田実「タダの人」の思想と文学』、一二七頁。

一七 小田実『異者としての文学』、一八頁。

一八 中藪英助「葬送の鮮やかさ」(『アボジ』を踏む』の評論)『群像』一九九八年六月、四二四頁。

一九 小田実「私の自伝的小説論」『小田実評論撰4』、四三六〜七頁。

二〇 野間宏／初出『群像』(昭和三五年一月)。

二一 なぜ「似通っている」というと、野間宏は戦中派世代である一方、小田実は焼け跡世代に属し、大分異なる経験を積んできた。

二三 小田実 『小田実評論撰4』、四三七頁。

二四 小田実 『小田実全仕事1 明後日の手記／わが人生の時』、四三一～二頁。

二五 マレビトは、時を定めて他界から来訪する靈的もしくは神的存在を指す折口学の用語。折口信夫の思想体系を考える上で最も重要な鍵概念の一つであり、日本人の信仰・他界観念を探るための手がかりとして、民俗学上、重視される。

二六 小田実 「新しい『全体小説』への道」『小田実全仕事8 評論2』、一一九頁。

二七 日本の文壇的な言い方では、埴谷雄高、椎名麟三、武田泰淳、野間宏、梅崎春生、大岡昇平などの作家たちが、第一次戦後派文学者と呼ばれている。彼らは、一九〇九(明治四二)年から一九一五(大正四)年にかけて生まれた「戦前派」に属している。こういった戦後派文学者たちの大多数は、戦前に軍国主義、社会主義、天皇制イデオロギーという過激な思想の洗礼を受け、生々しい戦争を体験している。第二次世界大戦後には、その負の体験を踏まえて、戦後派文学者たちは、独自の形而上学的方法、たとえば、キリスト教的、あるいは、仏教的宗教観、全体小説(個人の内なる世界と、それを包み込む社会の双方を総合的に描く)の理念などをそれぞれに掲げて、戦争体験と戦後世界の現実に、想像力をもって対峙していった。

二八 小田実 『異者としての文学』、二一〇頁。

二九 黒古一夫 『小田実「タダの人」の思想と文学』、七〇頁。

三〇 『小田実全仕事1』、一〇三頁。

## 発表を終えて

10年以上前の話になりますが、若い頃にルーズと一緒に京都へ短い観光旅行に出かけたことがありました。その時は、東京で出会って暮らし始めたばかりの糟糠の妻との旅でしたので、京都というより二人の間に芽生えた愛情しか記憶に甦ってこないのです。

平成22年に日文研の外国人研究員になって、日本との長い付き合いが20年を超えたところにたどり着きました。ただ、今回の10年ぶりの来日では、以前のような独りぼっちな学者ではなく、一年かけて家族ぐるみで根無し草のように佇まない放流生活を選びました。双子の男の子ロマンとクリスは日本の初体験で近くの桂小学校に通わせていただいて、お父さんは自分勝手に研究を推し進めながら、互いに日本語の勉強にも切磋琢磨し合っていく日々を送ってきました。さらに、専業主婦お母さんルーズの音楽と日本語の練習を加えるならば、家族全員が忙しく充実した京都生活を味わわせていただきました。

2010年から11年にかけての京暮らしは本当にあつと言いつつ終わってしまいました。特に、日文研フォーラムが終わったところで、再びの、そして最後にもう一つの春の訪れを待ち遠しく思います。わずかしか残っていない現在の時点から、今回の日本滞在を振り返ってみると、「京生朝露」のように思われます。所属するシドニー大学の任務からほぼ解放され、長い年月をかけて研究し続けてきた焼跡・闇市世代とそれに因んだ小田実の思想と文学のモノグラフに対し、これまでにないほど心血を注ぎましたし、おまけに、多くの共同研究会に参加して、日本文化または社会に関する知識を深めるきっかけを与えていただき、誠に幸運であったと思います。

「また、いらっしやい」という最後の挨拶の時期が迫ってくると、サヨナラというより、今後ますます日文研とオーストラリア（そしてオーストリア）の研究機関との交流が発展していくことを願うとともに、私自身このご縁を大切に飛躍していきたいと思います。日文研の諸先生方、研究協力課の皆様より心からのもてなしと戮力協心を受けたことに厚

くお礼を申し上げたいと思います。特に、カウンターパートの鈴木貞美先生からは貴重なご助言と時間を賜りまして、深く感謝の意を表さねばなりません。最後に、家族全員、人生観が変わるような実り豊かな一年を体験することができたのは皆様のおかげです。

ありがとうございました。Herzlichen Dank.

Roman  
Rosenbaum